九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# 米沢図書館蔵倭玉篇の字音の拗音表記

梅崎，光
九州大学文学部助手

https://doi.org/10.15017/9413

出版情報：語文研究. 82, pp.49-57, 1996-12-25. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

# 米沢図書館蔵倭玉篇の字音の拗音表記

梅崎　光

米沢図書館蔵の倭玉篇[注1]に付された字音注記のうち拗音表記の特徴的な点について報告する。

本稿で問題とする米沢図書館蔵本について、辞書史のうえから川瀬一馬氏はつぎのように記述している。

米沢図書館蔵の一本は室町末期の写本で、もと直江山城守兼続の旧蔵にかゝる。上下二巻（一冊）、上巻は目録一葉・本文墨附五十一葉。下巻（衣部より）は目録二葉・本文墨附四十四葉、上巻の篇目五十九、下巻同二百四十六、合せて三百五部。毎半葉八行八段書写。二巻に分つ点は他の凡ての伝本と異る点であつて、各巻別に部首を通算してゐるのは、前記判紙本の一本と相似の関係にあるが、その部首配列の順が中間の部分に於いてすべての第四類本と異るのは或は本書のみの任意の改変であらう。第三肉部はなく、心部は分立してゐる。」（『増訂　古辞書の研究』雄松堂、一九八六年二月　720頁）

ここにいう第4類本とは、川瀬氏が倭玉篇諸本を8類に分類したもののひとつで、「最も多く伝写されてゐて、室町時代に於ける倭玉篇の流布本と見るのが適当」（682頁）とのことである。

本書の来歴をしるてがかりとしては、上巻目録（1丁オ）に存する「米沢蔵書」の印がある。川瀬一馬氏が「直江山城守兼続の旧蔵にかゝる」と述べたのは、この印記によるのであろうか。ただ、この「米沢蔵書」印をもって直ちに直江兼続の旧蔵書と断ずることには疑問を呈するむきもある。森鹿三氏「米沢藩学とその図書の歴史」（内田智雄氏編『米沢善本の研究と解題』ハーバード・燕京・同志社東方文化講座委員会刊、一九五八年八月）19～20頁に、

私はむしろこの印を以て兼続の蔵書印とは認めがたく、結局は、元禄十二年の矢尾板検書前に米沢の藩庫に収儲された書籍に捺された官用の蔵書印とするのが、より妥当的ではなかろうかと思っている。

とあるごとくである。だがいずれにせよ、同書にも引用された『官庫御書籍目録』（巻末に「右者元禄十二年六月中矢尾板三印江被仰付改正之御書籍目録帳一冊御右筆所在之御帳ヲ以寳暦七年六月中虫乾之節御右筆所為手扣書寫之者也」とあるとのこと）の「三番乾五日　十篋」には「和玉篇（一）」とあって（同書15頁）、元禄12年当時すでに米沢藩の書庫におさまっていたのであるから、本書の成立

年代が室町末期から近世初期までのどこかであることは確実である。

なお、菊田紀郎氏「米沢図書館蔵和玉篇の和訓」（『国語学研究』25、一九八五年一二月）によると「下巻七丁と二三丁の用紙の中に挿入紙がある。共に、本文とは別筆で、前者は草書体で「行程均求レ媚」云々と記され、後者は楷書体で次のように記載されている。兼連（ツク）甄（アヤヤカナリ／ヤカヽミル）兼続（ツク）　葦（ギヨク）馬（ウマ）屈（ツヨ）槽（ウマ）」とのことである（同論文2頁）。しかし、この挿入紙と本書の由緒との関係いかんについては特に言及はない。

さて、本書を資料とした従来の研究としては、菊田氏の一連の論文がある。そこでは、おもに和訓や漢字注が対象としてとりあげられ、他の倭玉篇古写本や倭玉篇以外の古辞書などと比較してゆくといった方法によって、倭玉篇諸本における本書の位置づけがさぐられているようである。一方、漢字に付された注記としては、カタカナで表記された字音もあるのだが、それについてはあまり関心がはらわれていないようにみえる。しかし、米沢本の字音には拗音の表記において特徴的な点があり、以下において、その意味するところについて考察してみたいとおもうのである。

本稿で問題とするのは、本書にみられる「首（ショ）115・71」「助（シュ）047・23」のような例である。これらは、「シュ」という音注が期待されるところに「ショ」、逆に「ショ」という音注が期待されるところに「シュ」がそれぞれ付されているものである。かかる類例はつぎにしめしたごとく、多数みいだされる。参考までに、『玉篇略』や『伝紹益筆本』等、他の倭玉篇諸本における表記を並記したものがある。これらの所在表示の方法も、米沢本と同様、本文のはじまる面を第1頁と勘定し、たとえば「23頁第5行の4番め」を「023・54」のごとくあらわした。『玉篇略』は「古辞書叢刊」（雄松堂、一九七六年）、『伝紹益筆本』は「マイクロフィルム版　静嘉堂文庫所蔵古辞書集成」（雄松堂フィルム出版部、一九八六年一〇月）による。

◆　ショ（ジョ）とあるべきものがシュ（ジュ）と表記されているもの―17例

@樵（018・78・シュ）（『伝紹益筆本』023・54・ショ）
@杵（020・45・シュ）
@渭（038・84・シュ）（『玉篇略』039・27・ショ）
@助（047・23・シュ）（『玉篇略』047・52・ショ）
@駕（063・66・シュ）（『玉篇略』062・22・ショ）
@驗（069・53・シュ）（『玉篇略』070・55・ショ）
@醋（105・54・シュ）（『玉篇略』095・87・ショ）
@所（112・76・シュ）
@謖（015・75・シュク）（『伝紹益筆本』019・64・ショク）
@植（019・18・シュク）（『伝紹益筆本』023・76・ショク）
@栻（019・31・シュク）（『伝紹益筆本』023・87・ショク）
@溽（034・44・シュク）（『玉篇略』034・74・ショク）
@濁（035・58・シュク）（『玉篇略』035・87・タウ・チョク）
@溽（039・32・シュク）（『玉篇略』034・74・ショク）

@褥（103・88・シュク）（『玉篇略』094・16・ショク）
@辱（119・35・ジュク）
@蠹（161・53・シュク）（『玉篇略』165・53・ショク）

◆ シュ（ジュ）とあるべきものがショ（ジョ）と表記されているもの―53例

@曙（003・11・ショ）（『伝紹益筆本』003・37・トウ・シュ）
@銖（031・26・ショ）（『玉篇略』031・68・シュ）
@澁（037・72・ショ）（澀『玉篇略』038・16・シウ）
@手（051・11・ショ）（『伝紹益筆本』063・21・シュ）
@鴆（062・66・ショ）（『玉篇略』061・64・シュ）
@陬（085・76・ショ）（『玉篇略』078・32・シュウ）
@守（091・31・ショ）（『玉篇略』081・53・シュ）
@修（093・84・ショ）（『玉篇略』084・38・シュ）
@脩（093・85・ショ）（『玉篇略』084・41・シュ）
@頌（095・26・ショ）（『伝紹益筆本』123・77・セウ・シュ）
@須（095・44・ショ）（『玉篇略』086・47・シュ）
@孺（099・52・ショ）（『玉篇略』090・45・シュ）
@酒（105・37・ショ）（『玉篇略』095・64・シュ）
@醹（105・84・ショ）（『玉篇略』096・31・シュ）
@首（115・71・ショ）（『玉篇略』106・81・シュ）
@茱（134・12・ショ）（『玉篇略』126・45・シ）
@數（138・61・ショ）（『玉篇略』135・13・シウ）
@趣（140・64・ショ）（『玉篇略』138・34・シュ）
@竪（146・33・ショ）
@殳（148・21・ショ）（『玉篇略』149・21・シュ）
@受（152・71・ジョ）（『玉篇略』154・24・シュウ）
@鞀（158・73・ショ）（『玉篇略』161・78・シュ）
@糯（166・21・ジョ）（『玉篇略』171・16・シュ）
@須（175・41・ショ）（『玉篇略』182・31・シュ）
@麌（180・54・ショ）（『玉篇略』188・84・シウ）
@麈（185・45・ショ）（『玉篇略』194・83・シュ）
@需（187・24・ジョ）（『玉篇略』197・54・シュ）
@殳（目録巻下1・83・ショ）
@宿（091・17・ショク）
@縮（126・62・ショク）（『玉篇略』119・18・シュク）
@蓿（133・21・ショク）（『玉篇略』123・31・シュク）
@閱（141・45・ショク）（『玉篇略』139・84・シュク）
@蜀（175・63・ショク）（『玉篇略』182・64・シュク）
@卹（177・34・ショツ）（『玉篇略』184・72・シュツ）
@旬（001・48・ジョン）
@捘（052・64・ション）（『伝紹益筆本』065・27・シュン）
@拘（056・26・ション）（掬『玉篇略』056・67・シュン）
@躇（059・63・ション）（『玉篇略』060・73・シュン）
@跋（059・83・ション）（『玉篇略』060・55・シュン）
@徇（093・46・ション）（『玉篇略』083・82・シュン）

@醇（105・74・ション）（『玉篇略』096・18・シュン）
@笋（122・82・ション）（『玉篇略』115・22・シュン）
@奠（123・42・ション）（『玉篇略』115・57・シュン）
@純（128・13・ション）
@殉（140・35・ジョン）（『玉篇略』137・65・シュン）
@峋（147・22・ション）（『玉篇略』147・85・シュン）
@准（151・22・ジョン）（『玉篇略』152・44・シュン）
@舜（152・64・ション）（『玉篇略』152・34・シュン）
@雛（153・12・ション）（『玉篇略』154・63・シュン）
@隼（153・26・ション）（『玉篇略』154・76・シュン）
@旬（160・62・ション）（『玉篇略』164・46・シュン）
@隼（162・15・ジョン）（『玉篇略』154・76・シュン）
@嶟（175・66・ション）（『玉篇略』182・74・シュン）

これらは表記面からだけみると、「ユ」「ヨ」の文字がいれかわったものにすぎない。だがこうした交替表記がみられるのは、シュとショとに独特なもののようである。すなわち、「キョ」「チョ」「ニョ」「リョ」が「キュ」「チュ」「ニュ」「リュ」と表記されるような例はみあたらないのである。

これと同様な表記が見られる文献をほかにもとめてみると、まず『天正狂言本』があげられる。所在を『狂言古本二種』（わんや書店一九六四年七月）によってしめすと、つぎのような例がある。

ショ→シュ

鴈しゅ〈雁書〉（5上17）／しゅまふ〈所望〉（5下18）／しゅまふ〈所望〉（5下19）／しゅりやうもち〈所領持〉（28上18）／しゅ国〈諸国〉（17下1）／しゅ国〈諸国〉（17下4）

シュ→ショ

しよく〈宿〉（10上21）／しよ行〈修行〉（20上2）／ちしよ〈地主〉（14下19）／どくしよ〈読誦〉（13下23）／しよみやうちやうをつ〈寿命長遠〉（17上15）／しよんきやく〈順逆〉（25上8）／しよんの舞〈順の舞〉（25下6）

ただし、『天正狂言本』には以上のような例のほかに、ウ列音とオ列音との交替表記という点では共通な、つぎのような例もある。[注2]

せう〈主〉／せうく〈秀句〉／せうと〈舅〉／ちう〈長〉／ひう〈豹〉／ふゆふ〈芙蓉〉／みうたん〈妙丹〉／きふけ〈教化〉／ぢんちう〈尋常〉／こきふ〈児校〉／みうおつかう〈妙音講〉／はくゆふ〈伯養〉／一ひう〈一俵〉／ざうゆう〈雑用〉／ちうほく〈調伏〉／きふろん〈経論〉／しやうぎふ〈聖教〉

右記のように、『天正狂言本』におけるウ列拗長音とオ列拗長音とのあいだには、各行にわたって交替表記がみられるのである。（ただし、ウ列→オ列はサ行にかぎられる。）

さて、こうしたウ列拗長音とオ列拗長音の交替表記例は、米沢本倭玉篇においてはそうおおくは出現しない。みつけたかぎりのものは以下の例である。

◆　カ行

@頬（094・43・キウ）（『伝紹益筆本』122・73・ケウ）

◆　サ（ザ）行

@炒（023・15・シウ）（『玉篇略』022・67・ヘウ。米沢本の音注は「抄」と誤認したものか）

@招（052・54・シウ）（『伝紹益筆本』065・21・ショウ。単に書写の過程で「ヨ」が脱落したものという可能性もある）
@抄（056・33・シウ）（「053・17」には「セウ」とあり）
@袖（103・12・セウ）
@劭（139・73・セウ）（「州」の別体としての音注）
@秀（163・71・セウ）
@十（162・11・ゼウ）

◆　タ（ダ）行

@輙（096・42・チウ）
@嬲（101・81・チウ）
@剛（139・22・チウ）（『玉篇略』136・48・テウ）
@儔（010・31・テウ）
@忠（065・51・テウ）
@綢（126・51・テウ）
@稠（144・13・テウ）
@雕（153・25・テウ）

◆　ヤ行

@燿（025・58・ユウ）（『玉篇略』026・18・ヨウ）
@鶴（062・45・ユウ）（『玉篇略』061・45・エウ）
@遥（082・84・ユウ）（『玉篇略』076・37・ヨウ）
@孕（099・23・ユウ）（『玉篇要略集』085・15・ヨウ）
@幺（183・11・ユウ）（『玉篇略』192・21・エウ）
@幼（183・26・ユウ）（『玉篇略』192・23・ヨウ）
@誘（013・55・ヨウ）（『伝紹益筆本』017・23・ユウ）
@楢（021・73・エウ）（『玉篇略』022・28・ユウ）

◆　ラ行

@楞（023・14・リウ）（『伝紹益筆本』027・47・レウ）

なお、以下の3例には「エウ」という音注が付してある。複製ではっきりと確認するのは困難であるが、これらはもと「ユウ」とあったものを別筆で「エウ」と訂してあるようにもみえる。また、語頭のエを表記するカナとして本書ではもっぱら「ヱ」を使用しているという点から、この「エウ」という表記は異例なのである。よって、後人による音注という可能性があるので、ここにはふくめないことにする。游（035・24）／勗（045・87）／嘲（088・78）

さて、これらの例においてウ列表記となっている漢字の音は、本来は合音であるものばかりである。また逆に、もともとウ列であるものがオ列表記になるとき、それはかならず合音のかたちとなっている。このようなウ列拗長音とオ列拗長音（のうちの合音）との交替表記については、それが中世末期から近世初期のさまざまな文献にみられることが指摘され、なぜそのような表記がでてくるのかという問題が議論されてきた。[注3] そうしたなかで迫野虔徳氏「オ・ウ段拗長音表記の動揺」（「国語国文」44－3、一九七五年三月）が、これをオ列長音の開合の区別にかかわる問題として論じている。

この論文で迫野氏はつぎのような解釈を提示された。すなわち、オ列長音の開音が合音に接近することで開合の区別を解消しつつあった時期に、この区別を保持するべく合音がウ列長音（拗長音に限定されない）に音価を近似させた結果、こうした表記例が出現するにいたったのであると（同論文39頁以下をもとに要約）。

本稿の筆者も、この問題に関しては、この解釈にしたがうべきものとかんがえている。とすると、米沢本倭玉篇にウ列拗長音とオ列合音との交替表記がみられることは、この文献が室町時代末期から江戸時代初期の成立であることからみて、そうめずらしいことでもないということになる。

だが、最初にあげたシュ←→ショ交替表記に対しては、こうした開合の区別とは別の事情がからんでいるようである。

実は、おなじ米沢図書館に蔵せられている『沙石集』の写本に、倭玉篇とおなじ傾向があることが報告されている。片岡了氏「米沢市立図書館蔵「沙石集」の拗音表記」（「大谷学報」55－3、一九七五年一二月）によると、「白居易（キュ）」の1例をのぞいて、長音でないウ列拗音とオ列拗音との交替表記例が存するのは頭子音がサ行・ザ行のものにかぎられ、ことなり数で22個の交替表記例がみられるという。[注4]そうした例のみられる理由として片岡氏は

結局［sio］と［siu］（又は［jo］と［ju］）の韻尾の母音［o］・［u］に問題が行きつくことになる。その母音が先の拗長音でもそうだったように、明確なきこえをもった［o］・［u］でなく、表記上両様の形を許すような中間の音だったのであろう。ただこの場合、先にも記したように、その相通が、サ行・ザ行に偏しているところからすると、シ・ジの子音［ʃ］・［ʒ］につられて、後続の母音が口蓋化せられて区別がつきにくくなっていたものと解される。（63頁以下）

という事情を推定した。そのうえで、「この他にオ列長音及びオ列開拗長音の表記に関しても検討を要する。それら全体が方言との結びつきをもつのかどうかという点も考える必要がある。」（64頁）と、かかる事象と方言との関係を示唆された。

そういえば、さきに本書と共通する表記例のみられる文献としてあげた『天正狂言本』は東国方言を反映するものとされている。[注5]また、そうした過去の東国方言の様相をつたえるとされる天正本以外の文献についての報告も、これまでにいろいろなものがでている。[注6]結局、本書にみられる交替表記もそうした方言的要素の露出したもののひとつだとおもわれるのである。

実際、現代の東国方言をながめてみると、ウ列拗音とオ列拗音の合流のみられる方言が山形県[注7]・新潟県[注8]・長野県[注9]あたりに分布しているし、そうした傾向は、さかのぼって江戸時代の文献においても記録されている。たとえば、氏家剛太夫『荘内方音攷』には「○方音、ユョの音に別なく、皆ヨと唱ふ。露をツョ、雪をヨキ、春風をションフウ、冬風をフョカゼと言ふの類なり。【中略】是より及ぼして、チウ　ジウ　キウ等いふ音をテウ　ゼウ　ケウなど呼ぶなり。例へば忠臣寵臣に別なく、一重一丈を混じ、灸治経師の分ち無きが如し」（三矢重松氏『荘内語及語釈』刀江書院、一九三〇年七月、67頁）とある。現代とおなじく一九世紀初頭の庄内方言においてもウ列拗音とオ列拗音との合流はサ・ザ行にかぎらず、各行にみられるわけである。

天明七年の万象亭作『田舎芝居』にみえる「せうよたろ（醤油樽。313頁下・321頁下・322頁下）」「わかいしよ（若い衆。317頁上）」「よろして（許して。324頁下）」「百合（より）の花（323頁上）」というかたちも、中央語のユ（およびウ列拗音）に相当する部分をョ（およびオ列拗音）と発音する特徴を、越後方言らしさを表現する手段として利用したものである（引用は『洒落本大成』第13巻、中央公論社、

一九八一年七月）。なお、東條操氏「洒落本に現れたる方言の考察」（『方言と方言学』春陽堂、一九三八年六月）313頁を参照のこと。

また、迫野虔徳氏「古文書にみた中世末期越後地方の音韻」（『語文研究』22、一九六六年一〇月。引用は柴田武氏・加藤正信氏・徳川宗賢氏編『日本の言語学第6巻　方言』大修館書店、一九七八年一〇月、による）によると、こうした傾向がすでに中世において生じていたらしいことがわかる。そこにあげられた「ウ、オ段開拗音」の例も、長音でないのは「成就（しやうじよ）・御りうしゆ（料所）・よう（ふ）しゆ（用所）・しゆやく（諸役）・扶助（ふじゆ）・一しゆ（緒）・一しゆ（所）」（593頁以下）のようにサ（ザ）行のもののみであって、米沢本沙石集や倭玉篇と表記上の傾向において類似するものがある。米沢本倭玉篇にみられる交替表記例も、このような方言のもちぬしによって音注が付された結果なのであろう。

では字音以外にも、東国方言の影響をおもわせる事象はないであろうか。まず、いま問題にしているのと同様の表記が「冬（フヨ）079・36、151・18」「醎（ユウ）106・14」という和訓の表記にもみつかる。残念ながらいまのところこれ以外の例がないのであるが、やはりユ↔ヨの例とみられる。とすると、《ウ列拗音とオ列拗音の交替表記のみられるのはサ（ザ）行だけ》という、さきほどの傾向に対する例外となるわけである。また、米沢本沙石集にも1例ながらキョ→キュの表記例があった。そうした事実を重視すれば、かかる表記が出現する条件として片岡氏がのべられた「シ・ジの子音〔ʃ〕〔ʒ〕につられて」云々のような推定には問題があるのではないだろうか。

また、音声とかかわりそうなものとしては、ヒとシの混同とみられる例が「否（088・42・シ）脂（005・65・ヒ）」の2例ある。

さらに「瘙（カエカリ）109・45」「疥（カエカリ）109・18」「痒（カエカリ）109・12」といった例も、カユ→カイという変化をへたうえで、さらにイとエとの混同の結果その連母音の後半が「エ」と表記されたものであるかもしれない。

勿論これはユ→エという単なる誤写の可能性もある。実際、本書でエと表記されたもののなかには、「鶻（062・53・エッ）」のような、誤写とおぼしき例（鶻の音はコッ。ちなみに050・77には、おなじ鶻に対して「コウ」と注する）がある。また、「咽（087・31・ユッ）」「室（091・73・ユン）」「爰（152・63・ユン）」「雕（153・25・ユル）」のような、エ→ユの誤写とおもわれる例があるので、その逆の誤写例があってもおかしくはない。しかし、「癇（109・31・カヘカリ）」という例もあることであり、ここは単なる誤写とみるよりも、やはり「カユガリ」とは区別された「カエガリ」という語形を表記したものであるとしておきたい。

一方、表記以外の面では、あまり東国方言的な要素を指摘することがむずかしい。しいてあげれば、動詞活用の一段化の例が散見されることであろうか。以下、例をあげる。

膏（004・87・コエル）／膩（005・66・肥ー・コエル）／腫（006・53・コエル）／植（019・18・ウエル）／杜（022・82・ヒエル）／瓢（048・68・ウセル）／抜（057・37・ヒツサケル）／蹴（058・18・コエル）／践（058・44・ヲエル）／跨（058・54・コエル）／艱（080・

21・タシナメル）／飢（080・88・ウエル）／通（082・27・ツラネル）／寝（091・33・イネル）／安（091・42・イネル）／醎（105・83・シハヽエル）／痩（109・32・ヤセル）／疝（109・34・タエル）／痊（109・85・イエル）／瘳（110・36・イエル）／弩（115・22・カケル）／耐（119・36・タエル）／對（134・86・ヲヘル）／剸（139・13・タヘル）／剿（139・34・タエル）／創（139・55・タヘル）／殖（140・45・ウエル）／越（140・73・コエル）／超（140・74・コエル）／待（144・86・ウエル）／勝（156・82・タエル）／勦（157・24・タエル）／鋤（160・75・タエル）／髄（161・64・フセル）

語彙の面では東国的なものを発見することはできないが、本書の辞書としての性質上、方言的な要素が混入することはむずかしいのであろう。

以上、米沢本倭玉篇の字音表記の特徴的な点として、《ウ列拗音とオ列拗音との交替表記がサ（ザ）行に集中してみられる》ということを指摘し、そうした表記が、米沢本の編者自身の方言の影響によるものであろうと推定した。このことは、従来あまり明確に指摘されることがなかったようであるが、本書の成立事情をかんがえる際には重要な点だとおもわれる。また、過去の東国方言の様相をかいまみせてくれる文献であるという点からも、さきの沙石集と同様、米沢本倭玉篇は貴重な資料だといえる。

注

（注1）米沢本倭玉篇の本文、および用例の所在表示の方法は北恭昭氏編『倭玉篇五本和訓集成』本文篇・索引篇（汲古書院、一九九四年三月～九五年一月）による。

（注2）こうしたものもふくめた天正本の表記の特徴ついては蔵野嗣久氏がつぎの2編の論文にまとめている。「国語資料としての天正狂言本について―音韻表記の特徴を中心として―」（『国語国文論集』〈安田女子大学〉3、一九七二年六月）、「国語資料としての天正狂言本について　続・音韻表記の特徴」（『国語国文論集』〈安田女子大学〉4、一九七三年六月）

（注3）山田忠雄氏「法明童子」（『山田孝雄追憶史学・語学論集』宝文館、一九六二年一一月）・吉川泰雄氏「近古国語に於ける長拗音「ゆう」と「よう」の相関」（『近代語誌』角川書店、一九七七年三月）等参照。

（注4）長音のばあいには、各行にわたって交替表記がでてくる。

（注5）迫野虔徳氏「東国文献と言語指標―「天正狂言本」における「借りる」をめぐって―」（『北九州大学文学部紀要』7、一九七一年一二月）参照。

（注6）たとえば、洞門抄物や『元亀二年本運歩色葉集』『梅津政景日記』など。近年も小林芳規氏が角筆文献で庄内方言の反映したものを報告している。金田弘氏『洞門抄物と国語研究』（桜楓社、一九七六年一一月）、迫野虎徳氏「『京大図書館蔵元亀二年本運歩色葉集』について」（『国語国文』42―7、一九七三年七月）、同氏「『梅津正景日記』―江戸時代初期東国語文献―」（『文学研究』79、一九八二年三月）、小林芳規氏「近世の角筆文献研究の課題―（坤）庄内方言の角筆文献の解明と方言史の開拓―」（『文学・語学』152、一九九六年一〇月）等参照。

（注7）川本栄一郎氏「東北方言の音韻」（『方言研究の問題点』平山輝男博士還暦記念会編、明治書院、一九七〇年八月）34頁「表10　ウ段音」によると、酒田市宮之浦では、「雪・百合・弓・指・醤油」「数珠・巡査・

五十・饅頭」「孺子・姑・葡萄酒」「注射・チューリップ・焼酎」「牛乳」のユ・ジュ（ー）・シュ（ー）・チュー・ニューの部分が、それぞれヨ・ジョ（ー）・ショ（ー）・チョー・ニョーと発音されるとのことである。しかしすべての行にわたってウ列拗音がオ列拗音になっているわけではなく、「牛乳」「急須・野球」「竜宮」の、ギュー・キュー・リューの部分はウ列音のままとなっている。調査語の問題があるのかもしれない。

（注8）加藤正信氏『方言学講座　第2巻　東部方言』（東京堂、一九六一年三月）372頁には、新潟県尾崎（オザキ）方言の記述として「四、jüの系列がない　老年層や中年層では、「夢」も「嫁」もともに［jome］と発音されて区別がない。共通語のjüには　jokï雪　jokï百合　joo言う　joogɔ夕顔　ˈojo お湯　のようにjoが対応し、この方言にはjüというモーラはないと認められる。老年層では共通語のjüだけではなく、hjü, gjü, kjü……など、この系列のすべてのモーラがなくなっている。すなわち、kjoori きゅうり　gjoonjoo牛乳　kjoosjoo九州　sjozïN主人　nizjo二十　cjoomoN注文　のようである。」とある。

（注9）馬瀬良雄氏「北信濃小川村桐山の方言」（『北信濃小川村桐山の民俗』一九七三年四月。引用は『日本列島方言叢書第8巻　中部方言考1　中部一般・長野県』ゆまに書房、一九九六年一月）50頁「共通語の／jü／軸　共通語の／jü／軸にはこの方言の／jo／軸の対応している語が多い。たとえば、　ヨ／jo／（湯）　フヨジョー／hujozjoR／（冬中）　ヨロ／joro／（ユリ―植物名―）　ヨーダチ／joRdaci／（夕立）　キョーヨーヤマ／kjoRjorjama／（共有山）　キョー／kjoR／（灸）　ジョンジョン／zjoNzjoN／（順順）　ジョーノ／zjoRno／（十能）　アンジョサマ／aNzjosama／（尼僧―庵主様より―）　ビッチョーグワ／biqcjoRguwa／（備中鍬）　ショー／sjoR／（衆）　ション／sjoN／（しゅん―食べ物などの食べごろ―）　ゴテーショ／gotersjo／（御亭主）」。